

## 瑠璃殿上(碧巖第十八則)の考察

陸 川 堆 雲

### 一 緒 説

碧巖第十八則は有名なる無縫塔の話である。それは慧忠國師と肅宗皇帝(代宗が正しいと云はれている)との問答であるが、慧忠國師は奏答を弟子の耽源に譲つたので、皇帝の所問に對して耽源は左の偈頌を以て奏對したことになつている。

湘之南潭之北。中有黄金充一國。

無影樹下合同船。瑠璃殿上無知識。

この偈頌は古來より濟下に於ては公案として用い、參禪して室内に於て參究するものである。而して末尾の瑠璃殿上と云ふ語句についての解釋は、古來曖昧で信を置き難く、何やら腑に落ち兼ねるので、私には長い間得心の行かざるものであつた。然るに曩き頃森克己博士著「遣唐使」を讀んだところ偶然にもこの疑問の解決をなし得る資料を發見したので、ここに小稿を草して同好の批判を請はんとするものである。

いま順序として古來の解釋の一斑を左に列舉して見ることにする。

#### 一、碧巖集秘抄

瑠璃殿上(碧巖第十八則)の考察

此書は白隱和尚の提唱の筆録と稱さるゝものであるが惜しいかな第十六則より第二十則まで欠けている爲めに、昔の碧巖抄を轉錄してその欠を補つてある。いま此の第十八則の解釋はそれが爲め生憎白隱和尚の所説でなくて碧巖抄の所説である。

「るり殿も爰では本分ぞ。爰に至ては知識の沙汰はなきぞ。知解情識の盡きた處を瑠璃殿と云た。そこそ無縫塔よ。」と云つて居る。一應筋が通つた様な通らぬ様な云ひ方であるが、知解情識の盡きた處を瑠璃殿と云ふ解釋は少しコシ附けで、語句に對する説明としては不完全と云ふべきである。又碧巖圓悟の評唱中に於ても瑠璃殿の文字について更に觸れていないところから見れば、此の時分既に不分明であつたのかも知れぬ。

二、釋宗演著、碧巖錄講話

「瑠璃の宮殿であるから八面玲瓏立派なものじや。此の宮殿には一切の差別を拂ひ盡して一味平等、鬼もなければ佛もない、衆生もなければ知識もないなどと云ふまいぞ。是れが無縫塔の下圖で御座ると擔つぎ出した。」

となつている。碧巖秘抄に於ては知識を知解情識と云う心理作用と解して居るのに反し、こゝにては知識を即ち坊さんと解している相違が出来て來た。字句の上からは後者の方が正しい解釋と思える。而して瑠璃殿は八面玲瓏の立派な御殿と云つているが、架空のものか實在のものかを明確にしてはいない。併し語意から察して架空のものとしていいらしい。

三、菅原時保著、碧巖私話

「無影樹下の合同船が彼の岸に到着すると、そこには極樂世界があり、内外玲瓏の玉の臺があり阿彌陀如來がまします。」

是の解釋は宗演和尚の解釋と同系のものであるが、更に一步を進めて阿彌陀如來が出て來るなどは全く遣りきれな

い。元來慧忠は六祖大師の直門であり其法嗣耽源も共に機鋒峻烈であつて第一義に終始し淨土的思想などは毛頭も見ることの出来ないのは兩人の傳記を見れば判明することである。この様なところへ阿彌陀如來などの出て来る筈がないではないか。

四、紹益禪師提唱 碧巖集講義  
今津洪嶽講義

「大悲大願の合同船の到着した彼岸には、七宝合成の内外玲瓏玉の如き臺があつて、極樂淨土とも、安養とも、涅槃とも申すとのことであるが、その瑠璃殿上に有り難たそうな金ピカの人が御座ると思ふたに云々。」

とあり菅原時保和尚と同系の解釋である。或は時保和尚の所説はこの書などを出據としているのか、又は同系の書き入れ本を種にして其儘講じているのかも知れぬ。

五、加藤咄堂著、碧巖錄大講座

「サテ合同船に乗つて一路平安、彼岸の「中に黄金有つて一國に充つ」てう極樂世界に到達して無縫塔はどんなものかと見ると、聞きしに勝る立派の御殿、中にはどんな尊い佛が在はすかと、覗いて見たら知識なし云々。」  
こゝでは知識を人物と見ている。而して瑠璃殿を一種の思想上の所在、架空上の金ピカ建造物としている。

その他の著書の所説も大抵大同小異であるが何れの諸説もその共通點は瑠璃殿を實在のものとなせず、架空理想の所在としている。つまり瑠璃と云う文字に化かされていることである。然るに井上秀夫氏だけは是等の行き方とは其選を異にして、全く研究的態度を以て是を檢討し、その所説は斷然群を抜いて一步を進めている。

六、井上秀夫著、碧巖錄の現代的解説

「瑠璃殿上とは、かの迦毘羅國の釋迦族を亡ぼした舍衛國波斯匿王の子瑠璃王(毘盧擇迦・惡生王)の故事から構想して、一般王族の宮殿を指したものであろう。「毘奈耶雜事」第八卷、「四分律」第四十一卷、「瑠璃王經」及び

太平記第三十五卷（參照）即ち、王族の宮殿なんか、慧忠國師の思想なんか了解出来る者が居るものか、と云つて暗に代宗皇帝を貶刺したものである。知識は鑑賞者、共鳴者、知己などの意。」

とあつて全く新説であり、具體的に一つの根據を持つものであり、その眞摯なる研究に對しては敬意を表するに吝さかではないのである。併し乍らこゝに瑠璃王の故事を持つて來るのは前後の關係から見ても唐突であつて、直に承服することは困難と云うべきであらう。

そこで私は先きに述べた森博士著「遣唐使」（一六八頁）に於て逢着した個所を抄録して新考察の基礎を提示する。そして森博士の文獻の出所は圓仁の入唐求法巡禮行記によつたものである。

「空海が師惠果の許しにより、唐代佛畫の名匠李眞等畫家十餘人を集めて胎藏金剛界の大曼陀羅十鋪を畫かせ（御請來目錄）、圓仁も遣唐大使僉從粟田家繼をして揚州開元寺法花道場瑠璃殿南廊壁上に掲げた梁代の畫家韓幹（梁代隨一の巨匠、その畫いた禽獸に眼を描き入れ、ば飛び走ると稱された）の筆になる南岳、天台兩大師の像を摸寫させたり云々。」（入唐求法巡禮行記）

とあつて瑠璃殿の字が電の如く我が眼を撃つた。併しこの瑠璃殿なるものが耽源の瑠璃殿上と如何なる關係にあるや、又是を耽源の瑠璃殿上と關係づけて果して妥當なるや否やと云ふ疑問が出来るのである爲めに、更に検討を加える必要が生ずる譯である。それ故に以下一々の資料を糺して最後に妥當なりとの結論を出すことにする。而して同書一〇六頁には此の事が揚州龍興寺のことになつて重記されているので、何れが正しいかと入唐求法巡禮行記の本文に對比したところ、龍興寺の方が正しいことが判明した。因に開元寺も龍興寺も我國に渡來した鑑眞和尚に深い關係のある寺である。

## 二 圓仁の入唐求法巡禮行記

圓仁は後に慈覺大師と追諡された人で比叡山の最澄、義眞の後をついで、日本天台を大成された高德である。下野國に生れ年十五にして叡山に登り最澄に師事したが、更に入唐して天台の奥儀を究めんと欲し、承和五年第十七次遣唐使に隨伴して渡唐し、五台山に登り志遠について天台を學び、長安に至つて大興善寺の元政より金剛界を學び、青龍寺にて胎藏界を修め、南天竺の寶月について悉曇を習つた。長安に留ること六年、其間圓仁は傍ら諸經典其他を書寫し佛道の研鑽に専心したのであるが、偶々會昌の排佛に遭つたので、遂に承和十四年に歸朝した。圓仁は彼の地に滯留の間遍歴中の苦心や見聞のあとを日記體の旅行記として書き残した。これが有名なる入唐求法巡禮行記四卷である。そして其内容は頗る具體的に素朴堅實の記述であり信憑性の高い文獻である爲め、今日學界に於ていろいろの方面から珍重せられ研究の對照となつてゐる。此書は今、大日本佛教全書遊方傳に收められてゐるが、先年ハーバード大學ライシユアワー教授により英譯刊行された。その精細なる脚註と別卷は非常の勞作で参照の價値大なるものがある。

而して瑠璃殿の記事は巡禮行記第一卷の開成四年（日本承和六年）正月三日の條にあるのでその關係部分を抄出引用して見る。

開成四年巳未、本國の承和六年巳未に當る。正月一日甲寅、此の年日や官俗休暇、當時三日の齋あり、早朝相公寺に入つて佛を禮して即ち歸り去る。三日始めて南岳・天台兩大師の像兩鋪各三副を畫く。昔し梁代韓幹なるものあり、是の人梁朝に當つて畫手の第一となす、若し禽獸の像を畫けば其の眼を著するに及んでは則ち能く飛走すと。

南岳大師の顔影に尋いで揚州龍興寺に於て寫著す、勅して法花道場瑠璃殿南廊壁上に安置す。乃ち大使僉從粟田家

繼に寫取せしめ一の歎謬なし。遂に開元寺に於て其の家繼をして絹上の容貌衣服の躰を圖するなり、一に韓幹の様に依る。又彼の院の同廊壁上に誦法花經を画寫し、數しば異感を致さんとし、和尚等の影數廿來に及び具寫する能はず、瑠璃殿の東に普賢廻風の堂あり、昔し火の起る有り、盡く彼の寺を焼く、焼いて法花堂に至れば誦經師靈祐なるものあり、此の普賢堂内に於て法花經を誦す、忽然大風起り院裏より吹き其の火を却ぞく、彼の堂焼けず、時の人因みに普賢廻風の堂と號す云々。(原漢文)

とあるが、この瑠璃殿こそは耽源の偈頌の指すものであることは後に詳述する。

### 三 龍興寺について

瑠璃殿のある龍興寺は唐の國家政策によつて建てられた代表的官寺である。大雲寺、開元寺も同様であるが、龍興寺は大雲寺が後に改稱されたものとも云はれている。唐朝佛教の大保護者であつた則天武后は即位の理論づけとなつた大雲經に因み各地の政治中心地に官寺を建て是を大雲寺と稱した。而してそれは遠く西域の安西(龜茲國)佉勒にまで及んだと云はれる。後には是と同じ意圖を以て龍興寺が建てられた(唐大和上東征傳)。又玄宗は同様の意圖を以て開元二十六年に各地に開元寺を建てた(佛祖統紀卷五)。開元は玄宗の年號である。是等の唐制を模倣して我國の國分寺が出来たものと云はれている。而して今こゝに問題として擧げる龍興寺は揚州所在のものである。この龍興寺のことを重修揚州府志(卷二八 寺觀志)によつて調べて見ると唐代の記事は意外に少なく宋代の記事のみが多く、唐代の建築その他について細かいことを知らんとする所期の目的の達し難いのは遺憾である。王安石の揚州龍興院記なども載つてゐる。猶この寺觀志には大雲寺、開元寺のことも記されているが「此の間數息の諸觀あり、以て亂意を攝す是れ蓋し禪那の濫觴なり」と記してゐるのは注目すべきことで、當時の天台道場に於ける修道の一斑が窺われる。而し

て「龍興寺壁は則ち唐時已でに有り、慧禮重建し王安石記を作ると爲す、故に舊志皆な宋時の所建となすは其の實は誤りなり」とある記事より見れば龍興寺の壁と云うは古來より有名のものでこれが瑠璃殿にあつたと見える。

その東廊の壁上に畫かれたものは多くの聖賢であつたが、南岳と天台の二祖などが中心であつたらしい。南岳と云ふのは天台第三祖南岳慧思のことであり、天台とは天台第四祖智者大師智顛のことである。而して龍興寺のことについては唐朝に於ける一般佛教史を一讀せば如何に此の時代に於ける佛教背景の盛大であつたかを知ることが出来、瑠璃殿問題も納得が可能となるであらう。

いま龍興寺の法華道場たる瑠璃殿の詳細を記す直接の資料ではないが、當時内道場と稱して禁中に道場を設けて、常に僧尼を出入せしめ國家の祈禱、或は帝の誕節其他の爲めに轉經行道せしめたもので、これは則天武后の頃より盛んとなり、玄宗の朝に至つて不空の如きはこの内道場を中心として内外に威を振り、肅宗の頃には内道場の供奉僧數百人、晨夜念佛讚經の聲は禁外まで聞えた。代宗の頃は内道場の極盛時であり、毎年降聖節には名僧を召して飯唄せしめ之を内齋と稱した。内道場には常に百餘人を住せしめ、その禁庭出入の儀も亦王公以上であつたとの事であるから、唐朝の一大官寺たる龍興寺の法華道場瑠璃殿上の大規模なる盛儀は蓋し想像以上であつたらう。

又成尋の有名なる參天五台五臺山記によれば龍興寺につき熙寧六年（一〇七三）五月四日の條に次の様に記してゐる。

「齋後即ち出で龍興寺に參ず。變眞和尚本任の寺に依るなり。先づ大佛殿の後壁收面の圖繪を禮す。摩騰三藏の影、二色は黒、手に梵筴を持す。竺法蘭の色は黒、手に朱軸青標紙、四十二章經一卷を持す。羅什、玄奘、惠遠、道安、道宣、慈恩等の影、長さ八尺ばかり、丈六の金色大佛三昧并に脇仕有り、堂内の莊嚴甚だ妙なり。次に管内僧正賜紫惠禮院に參ず。點茶兩度、湯一度、丁寧に禮拜し答禮し了る。五將軍安石大碑を立つ。新堂内に等身の釋迦有り、

文殊の立像、右雲上に獅子、背上に蓮華有り、普賢左雲上に口立つ。背に經筒有り、十六羅漢最も甚だ妙なり、僧正門を出で之を送る。驕に乗るの處切に返り了る。大佛殿、西大殿、五百羅漢の等身の像最も妙なり。大佛殿後、東廊十三間に法華經一部、維摩經、金剛般若等の文を刻み立て了る。云々」

とある、是は宋代のことで圓仁より後代で其間會昌排佛や政變などあつて昔のまゝの建物か不明であるが兎に角龍興寺の盛大な有り様がわかる、其背景をなす瑠璃殿についても想像がつくと思う。

#### 四 瑠璃について

瑠璃と云ふは元來一種の寶石のことであり、七寶の一と云はれ青色のもので又後になつて一種のガラスも瑠璃の稱が出来たとも云われているが、諸經典中に見える文字であるから印度より中國へと流轉した寶石であると思う。それ故に瑠璃殿と云えばその寶石をちりばめて造つた樓閣の様に思はるのであるが、常盤博士の支那佛教史蹟踏査記（一六〇頁）によれば長干寺の條に

「下つて宋の代に至り、天禧寺と稱され、元代に燬けたが、明の永樂十年に勅して重建し二十九年の長月日を以て九級の瑠璃塔を建てた（中略）瑠璃塔と云うのは磁器の塔の謂である。」

とあることから類推すると、寺院建築に磁器を用いて佛殿を莊嚴し美觀を添えたものゝ様である。されば龍興寺の瑠璃殿も或る程度磁器を使用した建築で、それに因んで殿名をつけたものかとも考えられるが、瑠璃殿と云う字面のみに幻惑されて、直に是を西方淨土などと即解するのは早計であると考えられる。併し乍ら佛殿建築に磁器が用いられたと云つても、中國に於ては磁器に優秀なる特技を有し頗る精巧華麗なる資材として殿宇の裝飾に利用し得たので、眞に瑠璃殿の名に負かざる立派な殿閣を磁器を以て造つたのかも知れぬ。或は又瑠璃の寶石を以て莊嚴したかも知れ

ぬ。唐朝の力を以てすれば相當程度の事は出来たものであろう。併し金閣寺、銀閣寺と云つても土臺から屋根裏まで金や銀で造つたものでないから瑠璃殿と云つても、全體が瑠璃寶石造りとは思えぬが何れにしても美觀壯麗、眼を驚かすに足る建築物であつたことは疑を容れない。

## 五 年代の照應とその検討

圓仁の入唐求法巡禮行記による龍興寺の瑠璃殿の記事によれば、その東廊壁上に畫ける畫像は梁代韓幹と云う名匠の筆になつたものとなつて居るがそれは圓仁の誤りで、韓幹は唐玄宗天寶初年王維の推薦によつて玄宗に供奉してその靈筆を揮つたのである。佩文齋書畫譜（第四七卷）によれば、西陽雜俎、歷代名畫記、唐朝名畫錄、京洛寺塔記、圖畫見聞志、米芾畫史等の資料により種々記しているが、支那書畫名家詳傳には次の様に記されている。

「韓幹は藍田の人、王維一たび其畫を見、遂に之を推獎す。天寶の初め入りて供奉となる。時に陳闕馬を畫き一時に榮遇す。明皇之を師とせしむ。韓詔を奉せしめて曰く、臣自ら師有り、陛下内厩の馬、皆な臣の師なりと、明皇益々之を奇とす、初め曹霸を師とし後自ら獨り擅にす、馬を畫き骨肉停句の法を得たり、傳染練素に入る、弟子孔榮頗る其の法を得たり。」

唐書藝文志には大梁の人、大府寺丞となつて居るが大梁は地名であらうか。その師曹霸は魏の曹髦の後で、髦は畫を以て魏に稱せられた、霸は開元中、畫名を得、天寶の末に召されて御馬及び功臣の像を寫した。筆墨沈著、神采生動す。杜甫爲めに丹青引を作つて之に贈つたとあるから韓幹は唐の玄宗時代であることは疑の餘地はない。趙子昂の松雪齋集によれば、唐人善く馬を畫く者甚だ多し、而して韓曹之を最とすとあるから馬を畫く名手であつたが禽獸が畫より出て走ると云ふ程の名匠であつたから佛祖の畫像にも神技を揮つたものと思はるゝ。即ち寶應寺三門、神西院北

方天王佛殿前面、菩薩及淨土壁、資聖寺北門二十四聖、資聖寺觀音院西廊四十二聖賢等を畫いたと傳えられる。而して以上の諸資料により本論の骨子を年代順に記すと次の通りになる。

中國年代記事

西曆

唐中宗 嗣聖七年(武后天授元年) 大雲寺建つ(後に龍興寺と改む)

六九〇

// 玄宗 開元二十六年

開元寺建つ

七三八

// 天寶元年

韓幹玄宗の供奉となる(瑠璃殿に畫く)

七四二

// 代宗 大曆十年

慧忠國師寂す

七七五

// 太曆十一年(?)

耽源奏對(瑠璃殿上)

七七六

// 敬宗 開成四年

圓仁入唐、龍興寺瑠璃殿を見る

八三九

以上の略年表によれば、年代順の検討に於て無理のないことを知ることが出来る。

六むすび

吉州耽源山應真禪師は、その傳記を見ると、慧忠國師の後繼者として國師の依頼を得た程のことだけあつて師に譲らぬ機鋒の敏峻であつたことは百丈懷海、麻谷寶徹、仰山慧寂などとの間に於ける問答商量に於て知らるのである。従つて慧忠國師に代つて代宗に奏對したのもこの流義を慣用したものと思われる。而して瑠璃殿上に知識なし、と云われたのは唐朝の代表的寺院に於て當時の名流の善知識が多數この法華道場たる瑠璃殿上に於て法華の諸行事を嚴修し、又此の殿上には、南岳、天台兩師を始め其の他の諸聖の畫像など飾られて唐朝の代表的盛儀が常に行われたのである。それを代宗皇帝は勿論のこと一般大衆と共に常に見聞し親炙して居た耽源が假用して是を偈頌中に取り入れたの

は自然であつたものと考ええる。かくて名僧知識の群集する瑠璃殿上に一人の知識だもない、否な人の子一人も無いと坐斷して其の見地を吐露したのである。かく坐斷の見地から云えば、天地間一物一草もないと云うのである。天あり地あり、日月星辰あり、山あり川あり、清平世界に閑地なし、車馬往來人人を見る底の當體を、廓然無聖と切つて放つた達磨の一句。更らに日月も照臨し到らず、天地も覆藏し盡さざる底を不識と切つて放つた見地と、瑠璃殿上に知識なしと云ひ切つたのと是れ同軌か。同轍か。果して什麼。耽源はこの見地を表現する爲めに具體的に而かも當時の佛教界の一大象徴である目前の瑠璃殿上を用いたのは當を得た表現と云うべきであらう。是を現代的にして云へば、東京驛前の丸ビル、新丸ビルに人が一人も居ない。妙心寺山内に坊さんが一人も居ないと一切を奪い盡して云つたら什麼。無縫塔と云うものは天下の工匠を駆使して設計築造する様な小ばけのものではない。人の眼、人の耳に觸るる森羅萬象、否な耳目の沙汰の届かぬ宇宙の外迄是れ一大無縫塔ではないか。これで瑠璃殿上の考察のむすびとする。

追記 本稿を草するに際し御助援と御好意を頂いた駒澤大學小川靈道先生、東洋文庫岩井大慧先生、都立大學教授

森克巳博士及び日本留學米人テリー學士に深謝します。

(昭三二、九、一〇)